令和４年度 人権作文集

人権の芽

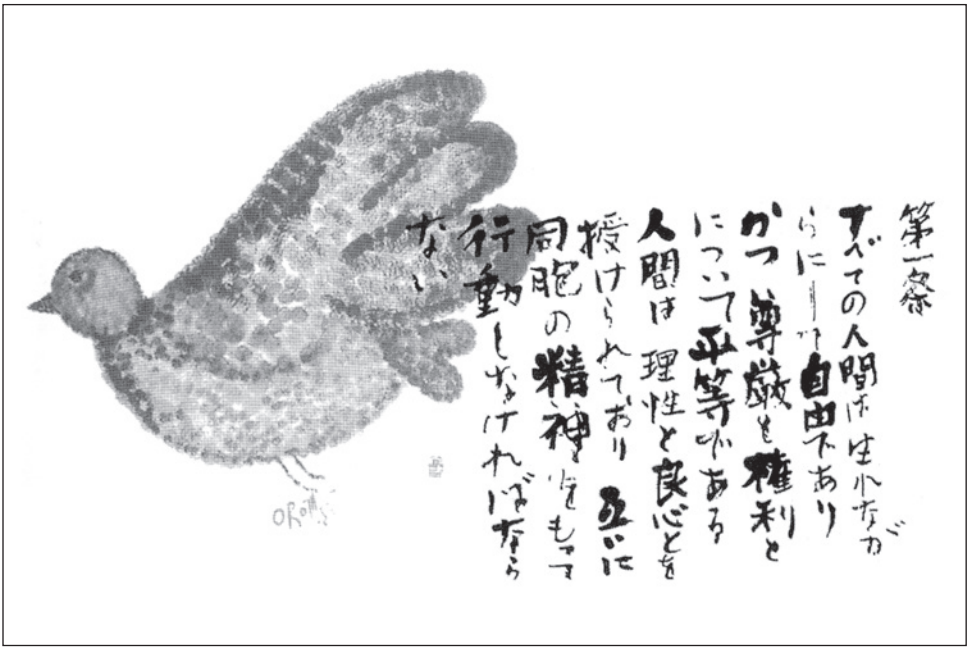
第55集

子どもの人権を守り 豊かな心を育てよう

人権イメージキャラクター
「人KENまもる君」

人権イメージキャラクター
「人KENあゆみちゃん」

神戸地方法務局　兵庫県人権擁護委員連合会



世界人権宣言啓発書画

「鳥」「自由と解放」を表わしたもの

小木太法 書
オタビオ・ロス 画

世界人権宣言とは…

（一九四八年十二月十日 国際連合第三回総会において採択）

第二次世界大戦は、五、六〇〇万人を超える犠牲者を出した悲惨な戦争でした。

この厳粛な経験から、二度と戦争を起こさないためには、全世界で基本的人権が確立されなければならない、ということが理解されました。

そこで、世界各国の人々及び国が達成すべき基本的人権の基準を宣言したのが、「世界人権宣言」です。

世界人権宣言の基本にあるのは、全ての人間は生まれながらにして自由であり平等である、という理念です。

そして、基本的人権は、いかなる差別を受けることなく享有できなければならない、と宣言しています。

全国中学生人権作文コンテスト
兵庫県大会表彰式

と　き：令和4年12月17日
ところ：兵庫県学校厚生会館

人権イメージキャラクター
「人KENまもる君」

人権イメージキャラクター
「人KENあゆみちゃん」

子どもの人権SOSミニレター

神戸地方法務局と兵庫県人権擁護委員連合会では、返信用封筒と便せんを一体化した「子どもの人権SOSミニレター」を兵庫県内のすべての小・中学生のみなさんに配布しています。

身近な人にも相談できずにいるみなさんの悩みごとを、このレターに書いて教えてください。人権問題に詳しい人権擁護委員がいっしょに考えて、悩んでいるみなさんの力になります。もちろん相談内容や個人情報などの秘密は守ります。

また、「子どもの人権SOSミニレター」のほかに、電話「子どもの人権１１０番」やメール「子どもの人権SOS－eメール」で相談することもできます。

小学生用

中学生用

はしがき

法務省と全国人権擁護委員連合会は、人権尊重思想の普及高揚を図るための啓発活動の一環として、昭和五六年度から「全国中学生人権作文コンテスト」を実施しております。

「人権作文コンテスト」は、次代を担う中学生が、人権に関する作文を書くことを通して、人権尊重の重要性、必要性についての理解を深めるとともに豊かな人権感覚を身に付けることを目的としています。本年度の兵庫県大会は、県内二九七校から八万四七六七編もの多数の応募をいただきました。いずれの応募作品も、家庭、学校又は地域での体験や見聞を通じて、障害のある人や高齢者、外国人、ＬＧＢＴの人々の問題、新型コロナウイルス感染症に関連した差別の問題など、人権に関する様々な問題を真剣に考えたことが、生徒自身の素直な言葉で表現されています。それらの作品からは、人を思いやる心や優しさにあふれた気持ちを感じとることができます。

本作文集は、数次の審査を経て選ばれた作文一五編を収録したものですが、これらの作品を一人でも多くの方々に御覧いただき、人権尊重の輪がより一層広がっていくことを願ってやみません。

終わりに、このコンテストを実施するに当たり、熱意を持って取り組んでいただいた中学生の皆さん、そして、御指導、御支援をいただいた各中学校・特別支援学校・各市町教育委員会・兵庫県教育委員会・ＮＨ

K神戸放送局・サンテレビジョン・ラジオ関西・阪神タイガース・楽天ヴィッセル神戸・コベルコ神戸スティーラーズ・西宮ストークスの皆様方、共催いただいた神戸新聞社の皆様に、厚く御礼申し上げます。

令和五年二月

神　戸　地　方　法　務　局　長　西田　正延
兵庫県人権擁護委員連合会会長　工藤　涼二

目　次

【審査の感想】
人権の「インフラ」を築こう　兵庫県大会審査員長 神戸新聞社編集局報道部長　小　山　　優

【作文の部】
最優秀賞
「見える障害と見えない障害」……太子町立太子東中学校　一年　猶　原　聖　翔……1
個性という名の名札……尼崎市立塚口中学校　一年　圓　谷　大　翔……4
私の人権……加古川市立浜の宮中学校　一年　奥　谷　穂　香……7
臓器提供について考えたこと……新温泉町立夢が丘中学校　二年　長谷川　栞　帆……10
私たちから始める小さな一歩……加古川市立平岡中学校　三年　長　井　　桜……13
兵庫県教育委員会賞
奇跡の命……姫路市立増位中学校　三年　レ　ミ　ユ　ン……16
ＮＨＫ神戸放送局賞
普通とは？……西脇市立西脇南中学校　一年　内　橋　瑛　万……19
サンテレビ賞
私の太陽Ｒちゃん……洲本市立青雲中学校　一年　岩　鼻　咲　希……22

ラジオ関西賞
当たり前ではない……小野市立河合中学校　九年　佐々木カーンマックス　ロハン……26
兵庫男女共同参画委員会賞
男女共同参画社会について……新温泉町立浜坂中学校　三年　福原　唯……29
兵庫子ども人権委員会賞
閉じこめられた命……神戸市立駒ヶ林中学校　一年　三上　絢子……32
兵庫高齢者・障がい者人権委員会賞
知ろうとする人でいたい……姫路市立豊富小中学校　九年　萩原　花帆……35
優秀賞
真の優しさとは……豊岡市立豊岡北中学校　三年　下垣　優有……38
いじめ……尼崎市立成良中学校　三年　相木　彩寧……41
私が学んだこと……小野市立河合中学校　七年　堀田　望乃……44
奨励賞一覧……47

審査の感想

〈審査員〉

兵庫県教育長

ＮＨＫ神戸放送局コンテンツセンター長

サンテレビジョン地域情報局報道部長

ラジオ関西報道制作局報道制作部長

神戸新聞社編集局報道部長

兵庫県人権擁護委員連合会長

兵庫男女共同参画委員会委員長

兵庫子ども人権委員会委員長

兵庫高齢者・障がい者人権委員会委員長

神戸地方法務局長

（順不同）

人権の「インフラ」を築こう

兵庫県大会審査員長
神戸新聞社編集局報道部長
小山　優

新聞紙やインターネットを通じて、日々、ニュースを発信している私たちメディアの者にとって、令和４（２０２２）年は、世界情勢に振り回された１年でした。ロシアによるウクライナへの侵攻、欧米諸国と中国の対立、北朝鮮からの相次ぐミサイル発射など、世界情勢は緊迫の度を増し、日本も無関係とは言えなくなっています。国内でも、新型コロナの感染終息が見通せず、円安に物価高、電力のひっ迫など、日々、心がささくれ立つようなニュースがあふれています。そんな状況にもかかわらず、今年も多くの作品が寄せられました。ありがとうございます。

猶原聖翔さんは、周りの人からは少し分かりにくい障害について取り上げました。自分のコンプレックスと向き合うことは、簡単ではありません。勇気を出して、自分のことを理解してもらうだけでなく、相手のことも理解することの大切さを教えてくれました。

圓谷大翔さんの作文は、生き生きとした表現で、練習風景が浮かんでくるようです。個性はその人を表す「名札」。個性豊かな多くの人との出会いが、人を成長させることを示してくれました。多様な価値観を認めることが、人の成長に必要な〝栄養〟になるのでしょう。

相手のことを知り、社会の一員であると認めることが、人権の一つ。奥谷穂香さんは自分の病気を取り上げ、とても説得力のある指摘をしています。支えられた貴重な経験があるから相手のことも分かります。その心を持ち続けてくれることを願っています。

長谷川栞帆さんは、臓器提供について、深い考察を披露してくれました。自分の思いを押し通すだけでは、身近な人が悲しみ、傷つくことがあります。特に生きる、死ぬということは、自分だけで決めてはいけない。よく話し合い、バランスを取ることが大切だと気付かされました。

弟がダウン症である長井桜さんは、障がい者への理解が深まり、愛される大切な存在になるよう願っています。「相手の思い」を理解する、理解しようとすることが、喜びにつながる。そのような人が増えていけば、社会はよりよくなるでしょう。

皆さんの作文を読んでいて教えられたことがあります。世界では国と国、人と人が対立し、「分断」が進んでいると、言われています。自分のことしか見ようとせず、相手を思いやる気持ちや理解しようとする努力が足りないことが一つの要因かもしれません。

もしあなたが、思いやりや優しさを持てる相手が今は半径1メートルにいる人であっても、来年は10メートル、その翌年は30メートルと、広げる努力を続けてほしいと思います。一人一人の努力が少しずつ広がっていけば、やがて国境を超えられるはずです。認め合う関係を築くことが、よりよい社会の土台「インフラ」になるでしょう。

作文の部

兵庫県大会最優秀賞

「見える障害と見えない障害」

太子町立太子東中学校　一年

猶　原　聖　翔

「障害」という言葉を聞いた時、どんな場面が目にうかびますか。例えば、足が不自由で車いすに乗っている人、目が見えなくてつえをついたり盲導犬を連れている人、耳が不自由で補聴器をつけている人。いろいろと思いうかんでくると思います。これは、目に見える障害です。

ぼくの場合は、目に見えない障害が一番に浮かんできました。それは生まれつき脳の働き方が他の人と違うという特性がある人です。ぱっと見ただけでは分からない事が多く、何も問題がなさそうに見えても、深く関わっていくうちに、少しずつ周りの人達と違う部分が見えるようになっていきます。

ぼくが生まれた場所は、救急車の中でした。八ケ月という短い期間で生まれたので、未熟児でした。呼吸も止まっていてＮＩＣＵという、新生児特定集中治療室に三ケ月入院していました。病院の先生からは「言葉が出る確率は50％くらいです」と、言われていました。だから、ぼくは3歳から言語の訓練をずっと続けてきました。そのおかげで奇跡的に言葉は出るようになりましたが、そのかわり滑舌が悪い所があるので発音がしにくかったり、自分ではきちんと話しているつもりでも、相手に伝わりにくかったりする事が、小さ

な頃はありました。

小学生の時「おまえ、滑舌が悪いんじゃ。病院へ行ってこい」と言われて、笑われた事があります。とてもショックで傷つきました。そのせいで、人前で話をするのが怖くなり、人と会話をするのをなるべくさけて過ごしてきました。友達と遊びたくて輪の中に入れてほしくても、またからかわれるのが嫌で、1人で本を読んだり、みんなが遊んでいるのを、じっと見たりしていました。

ある日、何もしていないのにクラスメイトに筆箱をとられた事がありました。小さな声で「返して」と言いましたが、返してくれませんでした。とても不安で、心臓がドキドキしました。ぼくは大声で「返せ！」と、言いました。教室中に響いたぼくの声でクラスのみんなは、シーンと静まりかえりました。一人のクラスメイトが「もう筆箱、返したり。そんな事するの、やめたら？」と、言ってくれました。その様子を見た別のクラスメイトが「大丈夫か」と、ぼくの所へ来てくれました。

しばらくすると、クラスのみんなが次々と助けに来てくれて、ぼくの筆箱を取り返してくれました。ぼくは「ありがとう」と言って、勇気を出して自分の事を話しました。

今まで滑舌の悪さを気にして話せなかったこと、本当はみんなと一緒に遊びたかったこと。どれくらいみんなに自分の事を理解してもらえるのか、とても不安でした。でも、だまっていたら相手に何も分かってもらえないと思ったので、一生懸命、話しました。それを聞いたクラスメイトは「あぁ。そうやったんか。分かった。」と言って、ぼくの事を理解してくれました。筆箱を取った子も、謝ってくれて、それからぼくは、本当に何でも話せる友達ができました。

大切な事は、人と違う所があるからといって、その人を笑ったり、からかったりするのは絶対にしてはい

けないという事です。言われた人は、とても辛い思いをして、傷ついています。

もう一つ大切な事は、自分の心の中にコンプレックスがあっても逃げずに自分と向き合う事です。勇気をもって話す事で周りの人達が自分の事を理解して、助けてくれるようになります。目に見えない障害は、その人が心の中で抱えている問題や悩みはそばで見ている人には分かりません。でも、もし相手が話してくれたら、共感でき、理解してあげる事が出来ると思います。

もし、ぼくと同じような悩みを持っている人が、ぼくに話をしてくれたとしたら自分ができる事はしようと思います。ただ、自分が気付いた事を何でもやってあげるのではなく相手がどんな事で困っているのか、何を望んでいるのか、何をどう手伝えば良いのか、相手の立場になって、きちんと話を聞いてあげようと思います。

目に見える障害も、見えない障害も本人にとっては大変な事です。一人一人が相手を理解しようと努力し、思いやりをもって行動できたら、みんなが住みやすい世界になると感じています。

兵庫県大会最優秀賞

個性という名の名札

尼崎市立塚口中学校　一年

圓谷大翔

僕は小学生のころ、少年野球に入ってたけど、野球のセンスはなく、いくら練習しても、みんなのようにうまくならなかった。

うまい子の保護者の中には、そんな僕に陰で「あいつはもう野球をやめた方がいい」とか「やる気がない」と言う人もいて、本気でやめようかと悩んだこともあった。だけど、僕は足だけは速かった。なんとかそれを生かしたかったけど、そもそも試合に出れない。悔しい気持ちと情けない気持ちとで素直に野球を楽しめなくなっていた。

やめるのは簡単だった。でも、やめるのは逃げるようで悔しかった。僕のことをばかにした大人たちを見返してやりたい気持ちもあった。そこから、必死で練習して、それでも試合にはほとんど出られなかったけど、卒団までやり切った。

チームで、野球のうまい子でも、走るのが苦手でものすごく遅い子もいる。守備はうまいけど打つのが苦手な子もいる。野球のセンスはあるのに精神面が弱くて押されると試合中に泣きながらプレーする子も

いる。

たぶん、陰で僕がばかにされてるのを一番つらく思ったのは母だと思う。だけど、母はそういう子たちのことを一度もばかにしたり悪く言ったりしたことはない。そして、いつも僕に練習で走り込むとき、遅い子がいたら声をかけてあげなさい、自分より走るのが遅いからと見下すようなことはするなと言われた。「あなたが野球がうまくできないように、その子は走るのが苦手なだけ、みんな得意なことと不得意なことがある。でも、それはそれぞれの個性。できるから良くて、できないから悪いわけじゃない。苦手なとこは周りが補えばいいだけ」と教えられた。

僕は、野球に関しては毎日遊ぶ間を惜しんで練習してもみんなに追いつくことはできなかったし、結果を出せないので、それだけ陰で練習してることも分かってもらえなかったけど、自分ががんばってきたことはいつか自分の経験値として返ってくると信じている。

そして、僕は中学生になって、吹奏楽部に入った。走ることを生かせるスポーツを…と思っていたけど、たまたま友達に誘われて見学に行ったときに楽器を演奏することの楽しさにくぎ付けになった。ずっと運動をしてきた僕には未知の世界だったけど、今楽しくて仕方がない。ずっと野球は続けなければと思ってたけど、苦手なことに執着することはないし、新しいことに挑戦することで自分の個性を生かせる場を見つけることができるんだなと思った。

きっと、周りにも僕のように苦手なことをばかにされてつらい思いをし、できないことを何とかしたいと陰でいろんな努力をしてる人がいると思う。表面上だけ見て人を判断することのないように、自分よりできない人を見下すことのないように、そして、自分が人よりできることがあってもえらそうにすることがない

ように、誰にも平等に同じ態度で接することができるような人に僕はなりたい。

そして、自分にもできないことがあるように、何かに行き詰って困ってる人がいたら、優しく声をかけ、手を差しのべたい。僕もそうやってたくさんの人に助けられて今があるのだから。

個性はその人を表す名札のようなもの。みんな同じだときっとおもしろくない。いろんな人がいるからお互いに刺激になったり、助け合ったりで周りと楽しく過ごすことができるのだと思う。できないとこ、悪いとこに目をやるのではなく、その人のきらりと光るものを見つけられたら僕にとってもそれは大切な宝物になるように思う。

これから出会うたくさんの人のきらりと光る個性をたくさん見つけて、僕の人生の宝箱を満たしていきたい。

兵庫県大会最優秀賞

私の人権

加古川市立浜の宮中学校　一年

奥谷穂香

この人権作文を書くのにどんなテーマで書こうか考えていたら、母が金属のついた小さなチューブを神棚からおろして見せてくれました。6年前まで私のおなかに入っていた、腹膜透析のためのチューブです。腎臓移植手術の時に私の両親が、「6年近くも穂香の命をつないでくれたチューブだから」と病院の先生にもらった物です。

私は、両側性低形成腎という生まれつきの病気で腎不全でした。そのため、ミルクも母乳も自分の力では、ほとんど飲めず、体重が増えませんでした。栄養を補うために、鼻から胃に経管栄養のチューブを入れて特別なミルクを注入していました。鼻から出ているチューブが抜けないようにほっぺたにシールでとめるのですが母がいつもそのシールをハート形に切ってくれました。なぜハート形にしていたのかと母に聞くと、「出会う人が穂香の鼻にチューブが入っているのを見て、驚いたり、かわいそうに思ったりしないように」と話してくれました。

たとえ病気を抱えていても、自分らしく、たくましく成長してほしいという母の願いを知りました。その

母の願いとは、うらはらに、栄養チューブのことを興味本位で聞いてくる人もいたそうです。そのころの記憶は全くありませんが、その話を聞いて私は母の思いに泣いてしまいました。知らない人に病気のことをあれこれ聞かれるのは、いやな気持ちになるからです。

当時の母も泣きたい気持ちになったこともあったそうですが、逆に明るく「こんなに小さいのにおなかにもチューブが入っていて病気と闘っているんですよ。えらいでしょ?応援してあげてくださいね」と返したそうです。そう言うと「そうなんですね。えらいね。お母さんもがんばっているのですね」と大抵の人がはげましてくれました。

しかし中には声をかけてくることなく、指を指して何か言っていたり、じろじろと見られたりしたこともあったそうです。母は「偏見を持ったり差別をしたりするのは、その人のことを外見しか見ておらず、よく知らないからだ。身近に病気があってがんばっている人がいる人なら絶対にそんなことはしない」と言います。

私もその通りだと思います。初めて会った人が怖そうだな、きつそうだなと思っていても話をしたり、いっしょに過ごしたりするうちに仲良くなるのと同じだと思いました。病気や障害も含めて、その人のことをよく知ることが、相手を大切にする、つまり人権を尊重する第一歩だと思います。

小学校1年生の6月に腎臓移植をして自力で食事ができるようになり、栄養チューブも腹膜透析チューブも外すことができました。体は元気になったけど、他の人より体が小さかったり、移植した腎臓を守るためにしてはいけない運動があったりします。そのことを担任の先生が全校生に伝えてくれました。私のことをみんなが知ってくれていると、安心して過ごせます。

これも私の人権が尊重されているといえると思います。学校では黒板を消していると、届かない所は友達が手伝ってくれたり、病院に入院中もオンラインで授業が受けられるように先生方が協力してくださったりしました。感謝の気持ちでいっぱいです。

せっかく元気になったのだから、体が小さい私にもできることは何があるだろうと考え、家事の手伝いをしたり、学校では給食当番の友達の分の給食を運んだりしています。病気や障害があっても特別扱いばかりで何もさせてもらえないのではなく、その人が社会の一員として認められ、できることをさせてもらうのも大切な人権の一つだと思います。

今は、まだ身近で私ができることしか思いつきませんが、たくさんの人に支えられた私だからこそ、できることを探したり、増やしたりしながら生きていきたいと思いました。

兵庫県大会最優秀賞

臓器提供について考えたこと

新温泉町立夢が丘中学校　二年

長谷川　栞　帆

臓器移植のことを知っていますか。

臓器移植とは、重い病気や事故などにより臓器の機能が低下した人に、他者の健康な臓器を移植し機能を回復させる医療のことです。臓器提供は、脳死後あるいは心臓が停止した死後に可能となります。そのため、第三者の善意による臓器の提供がなければ成り立ちません。現在日本で臓器移植を希望し、待機されている方は、およそ1万5千人おられますが、実際に移植を受けることができる方は年間およそ４００人と、待機人数に比べ、かなり少ないのが現実です。

では、もしも家族の誰かに死が訪れたときに、臓器提供してほしいと言われたら、「はい」と答えることができるでしょうか。

私は最近、「臓器提供意思表示カード」を手に取り、趣旨を理解した上で、自分がもし「脳死後及び心臓が停止した死後のいずれでも、移植のために臓器を提供します」という意思表示をし、署名をしました。

この意思表示は、民法上の遺言可能年齢である15歳以上でなければ有効とはなりませんが、今の自分なり

に考え、達した結論でした。そして私は母に、家族署名欄に署名をしてほしいと頼みました。しかし、それに対して母の返事は、「脳死になっても、まだ心臓は動いていて死んではいない。人工呼吸器をつけ、生かされている状態だったとしても、命が続く限り生きていてほしい。自分がそのような状態になったときは、提供してとお願いするけれど、あなたの場合はできない」というものでした。

この言葉を聞いて、私の中によみがえってきた幼い頃の思い出があります。母は、私が小さい頃からよく、「もし自分に何かあっても何もしないで。延命処置は絶対にしないでね」「学生のときからドナーカードを持っていて、提供できるものは全部提供したい」と言っていました。

私が初めてそれを聞いたのは、保育園の頃でした。母に何かあったとしても、何もしないでと言われたことが、悲しくて、怖くて、心が苦しくて、それだけは絶対に嫌だと思いました。

だから、私の意思表示に、署名できないと言った母の返事は、大切な家族のことを真剣に思う気持ちなのだと、改めて気づきました。今でも、本人の意思表示があったとしても、家族の臓器を提供することにはちゅうちょし、たくさん悩むと思います。そして、できれば提供することをやめてほしいと言ってしまうかもしれません。しかし、移植をすれば助かる方がおられることを思うと、臓器提供をすることで、亡くなった家族が、移植を受けた方と一緒に生きていると思えるのかもしれません。

私は、もっと臓器提供について考えたいと思い、臓器提供を決断されたご家族や、移植を経験された方の手記を読みました。大切な家族に何があっても、どんな状況でも生きていてほしいという強い思いと、臓器提供をするかどうかの苦悩や葛藤とともに、命の決断という、とても複雑で辛い胸の内を知ることができました。意思表示カードに示された家族の思いをくんで、医師に臓器提供について話を切り出したときの話

や、意思表示カードはなかったけれど、医師から臓器移植のことを聞き、元気だった頃の本人の性格や生き方を振り返って、家族が提供を決めたという話もありました。

移植を受けた方は、移植できなければ命が助からないという恐怖、人の命を奪ってまで生きていいのかという思い、移植を受けて元気になった喜びとともに、ドナーの方やその家族の方への感謝などもつづられていました。

臓器を提供した人、提供された人は、互いに名前や住所を知ることも、直接会うこともできない決まりになっています。しかし、移植を受けた人が元気になったことを、その家族に、サンクスレターという形で伝えることができるそうです。そのおかげで、家族を亡くしても、移植を受けた人の中で元気に生きていることを実感し、残された家族の心の支えになっていることもわかりました。

臓器移植について、私たちは「提供しない」という意思表示をすることもできます。一人一人違う価値観や考え方があるので、臓器提供をしないから悪者ではありません。臓器提供をするかしないかの決断は、誰にも非難されることではないのです。

私も今後、様々な経験をすることで、考え方が変わるかもしれません。しかし、もしものときにどうするかということは、家族と何度でも話し合い、自分と家族がともに納得し、一番望む結果になるようにしていきたいと思います。人は、いつどうなるのか、誰にもわかりません。だからこそ、私は今を精いっぱい生きたいです。自分や家族にとって、命の選択はとても難しい問題ですが、今後も命について真剣に考え、命を無駄にしない生き方をしたいです。

兵庫県大会最優秀賞

私たちから始める小さな一歩

加古川市立平岡中学校　三年

長井　桜

私の弟は、障がい者です。ダウン症で知的障害があります。小さい時から弟と一緒に暮らしているので、障がいという存在が身近にありました。障がいと関わりの少ない人達は、障がい者にどのようなイメージや思いを持っているのでしょうか。

弟と出かけている時、弟が突然大声を出したり、ズボンを脱いだりすることがあります。その様子を見た人たちは、驚いたり、ジロジロ見たりします。時には嫌そうな顔をします。きっと、弟の行動が理解できず、奇怪に感じたのでしょう。弟だけでなく、他の障がいがある人の行動に、冷たい目で見ている人達に出会うことがあります。ニュースやインターネットでも、障がい者に対するいじめの報道や誹謗中傷の書き込みを目にすることもあります。

これらのことから、障がいに対するマイナスなイメージを持つ人がいるように思います。私の弟がそのように見られていると思うと、胸が痛くなります。その一方で、弟や障がい者に対して、温かく接してくれたり、優しい目で見てくれたりする人もいます。私のように、家族が障がい者であれば、障がいへの理解が生

まれてくるけれど、そうでない人達にとって、マイナスなイメージがあることは仕方がないことかもしれません。障がい者への理解が深まれば、障がい者だけでなく健常者も共に安心して暮らせる社会になると私は思っています。そのために、障がい者について、私が、伝えたいことが二つあります。

一つ目は、障がい者の言動には、本人の意思や思いが詰まっているということです。弟は、大きな声や物音を好みます。大きな音を出す為に、物を落としたり、机に物を叩きつけたりします。また、大声を出して反応してあげると、喜びます。周りからすると、耳が痛いほどの音で不愉快です。不愉快なほどの音を弟が好むのには、理由があります。弟には難聴があるからです。健常者からすれば、大きすぎる音ですが、弟にとっては、適切な音量だったのです。

また、ズボンを脱ぐ行動にも理由があります。それは、トイレのサインです。弟は発語がありません。そのため、今、ズボンを脱いでトイレを知らせる訓練をしています。知的障害もあるため、公衆の場であっても、ズボンを脱ぐことが恥ずかしいことと理解できません。家族にとっては、弟の行動が理解できるけれど、他人から見れば、不愉快な思いにさせると思います。このように、理解しづらい行動にも、障がい者の意志や思いがあるのです。障がい者の理解できない言動に出くわした時、何かを伝えたり、表現したりしているのだと思ってほしいです。

さらに、通りすがるだけの関係ではないのならば、その言動にどんな思いがあるのかを、知ろうと寄り添ってあげてくれたら嬉しいです。相手の思いが理解できた時、分かってもらえた本人も、気づけた自分自身も喜びを感じることができると思います。

二つ目は、障がいがある人も、私たち健常者と同じように、家族から愛される存在であるということで

す。障がいの種類や程度によって、生活に生じる困難さは人それぞれです。私の祖父は、昨年心臓にペースメーカーを装着し、障がい者として障害者手帳を持つことになりました。電磁波などに、注意が必要になりますが、今までの生活とあまり変わりません。弟は、食事やトイレなど全てに支援が必要で、1人でできることが少ないです。

それでも、家族や周りの人に支えられながら、リハビリに行ったり、訓練を重ねたりしながら、自立を目ざしてよりよく生きていけるようにがんばっています。祖父も弟も、私にとってかけがえのない大切な家族です。弟やもっと重度の障がいがある人たちの人生を不びんに思う人もいると思います。中には、障がい者の存在を否定する人もいます。

もし、自分の家族が障がい者だったら、そう思うでしょうか。障がいがある日突然、他人事ではなくなることもあるのです。障がい者に対して、否定的なとらえ方をせず、一人の人間として、家族として、愛される大切な存在であると知っていてくれたら嬉しいです。みんなが、そのような考えを持つことができれば、障がい者に対して、温かい社会になるのではないでしょうか。

以前に比べ、障がい者への理解が変化しつつあります。例えば、「障害者」から「障がい者」へと変更されてきています。「害」の与える印象を取り除くためです。また、「特別支援学級」が「障害児学級」などとされていた頃があったそうです。障がい者が、さらに生きやすい社会にするためには、福祉施設や制度の充実も大切だと思います。しかし、中学生の私たちに、それらを変えることは難しいです。障がいへの理解を深めることはできます。障がい者と健常者の共生を目指して、私たちから小さな一歩を始めませんか。

兵庫県教育委員会賞

奇跡の命

姫路市立増位中学校　三年

レ　ミ　ユ　ン

私の両親はベトナム人です。二人とも生まれはベトナムでした。

私はふと気になってどうして日本へやってきたのか聞いてみたことがあります。その時は軽い気持ちで聞いてみたのですが、話を聞いたあと、「命」とは何か改めて考えるようになりました。

今から約四十年前、私の母はベトナム難民（インドシナ難民）として祖母と共に日本へやってきました。難民となった原因は二十年もの長きに渡って続いたベトナム戦争でした。ベトナム戦争とは、北と南で分かれていたベトナムで起きた内戦ですが、主な内容としてはソ連などが支持する社会主義の「北ベトナム軍」と、資本主義の「南ベトナム軍・アメリカ軍」の戦いで、冷戦が背景にある戦争でした。

ジャングルでのゲリラ戦やアメリカ軍の空爆や枯葉剤のばら撒きなど、どんどんエスカレートしていく戦争にアメリカでは政府への批判の声が高まり、アメリカ軍はベトナムから軍隊を引き上げ、北ベトナムが勝利し、南を併合する形で戦争は終結しました。そのため、社会主義勢力が権力を握り、南ベトナムにいた人たちなどは、経済活動が制限されたり、迫害を受ける恐れがあったりなどの理由で国から逃げ出し「ベトナ

ム難民（インドシナ難民）」となりました。

当時まだ幼かった母は、抱き抱えられながら祖母と共に小さな漁船に乗り込みました。漁船にはギリギリまで人が乗り、手足を動かせるスペースは無く、息をするので精いっぱいだったそうです。このようなボートや漁船に乗って出国する人々のことは、「ボート・ピープル」とも呼ばれました。ボート・ピープルは運が良ければ、公海を漂流中に外国の船にめぐりあい、救助してもらうことができました。しかし、運が悪ければ、外国船にめぐりあうことができず、空腹や喉の乾きなどでそのまま餓死してしまうということもありました。さらには、漂流中、海賊に襲撃されるなんてこともあったようです。

他にも祖母と母から聞く内容は自分の想像をはるかに超える悲惨なものでした。祖母たちを含むボート・ピープルは、常に死と隣り合わせで、一瞬たりとも気を抜くことができず、僅かな希望を持って海をさまよっていたそうです。今では考えられない信じ難い話ばかりで怖かったです。でも、実際に経験した祖母たちはもっと怖くて辛かったんだろうなと思うと、涙が出そうになりました。

やがて、祖母たちをのせた漁船はある一隻の船とめぐりあったのです。日本の貨物船でした。その時、祖母は心の底から「良かった。助かった。」そう思ったそうです。この時の祖母の気持ちは何度考えても計り知れません。日本の船に救助された後、まわりの人たちと抱き合いながら涙が止まらなかったと教えてくれました。

祖母たち難民が日本に上陸した時は、一時滞在のみが認められていました。しかし、その後閣議決定によって、難民の日本への定住が認められました。その際、日本政府からの依頼を受け、難民のための定住支援施設が開設されました。一つは神奈川県大和市。そしてもう一つが、今、私たちが住んでいる兵庫県姫路

市でした。

日本政府が、姫路市が、私たちベトナム人を受け入れ、支援してくれたから今の私たちがあります。本当にありがたいなと思います。祖母たちの話を聞いてから、

「もし、祖母たちが日本の船とめぐりあっていなかったら…。」

「もし、日本がベトナム人を受け入れてくれていなかったら…。」

と、そんな「たら」「れば」を考えるようにもなりました。もしかしたら私は生まれていなかったかもしれません。今ここに存在していることって本当に奇跡だと思いました。今あるこの「命」は、たくさん人の思いやりや見えない力によって生かされているんだなと感じました。だから、私は生かされている分、人に対して思いやりの心を持ちたいです。そして、私に関わる全ての人やものに感謝の気持ちを忘れずに生きていきたいです。

今、姫路市ではロシアのウクライナ侵攻によるウクライナの避難者の支援活動を進めています。私の祖母たちが救われたように、この活動でもたくさんの人が救われると思っています。戦争は絶対にしてはいけないことです。戦争に限らず、一人でも多くの困っている人がいれば、手を差し伸べ、助け合うことができる。そんな世界になることを強く願っています。

NHK神戸放送局賞

普通とは？

西脇市立西脇南中学校　一年

内橋　瑛万

発達障害とは、生まれつきの脳の障害のために言葉の発達が遅い、対人関係を上手く築くことができない、特定分野の勉学が極端に苦手、落ち着きがない、集団生活が苦手、といった症状が現れる障害の一種である。十人に一人が注意欠陥・多動性障害の診断を受けており、療育などの支援が必要である。また、当事者は勉強だけでなく、対人関係や運動など苦労しているが、困難さが周りから見えない障害であるため、生きにくさに気付かれないことが多いと言われている。適切な療育や支援を受けることができないと自己肯定感が下がり、うつ病、不安障害、ひきこもり等の二次障害がおきるとされている。

私には三歳違いの兄がいる。兄は小学校に入学した時、周りの同級生が簡単にできていたまっすぐな線をマス目に沿って書く、教科書の文字を読みとばさない、ということにとても苦労し、さらに、周りの大きな音を苦痛に感じたそうだ。私は一緒に生活している中ではその様な苦労をかかえているということを知ることはなかった。

兄の障害を私が知る機会となったのは、小学校の時、兄が支援学校に通っていたからだ。その時は外から

聞こえる人の声や物音が気になり集中できないからだと思っていた。

今回この作文に取り組むにあたり、自分なりに調べ、兄のことをより詳しく理解したいと思った。兄が支援学級に通った理由を聞いた時、普通に出来ていることが出来ないからと教えてもらった。教えてもらった時、「普通って何よ。誰がそんなことを決めるの。お兄ちゃんだってがんばっているやろ。」と怒って聞き返したことを覚えている。

それから私は普通って何だろうと考えるようになった。考えれば考える程分からなくなった。当たり前に出来ていること、皆が出来ることイコール普通ではない。人それぞれ出来ることに違いがあり、普通だと思うことも様々であるため、ひとまとめで考えることはできない。今、兄は書きとることが苦手で、手先の不器用さやたくさんの指示を一度に出されると聞き取れなくなるものの、メモを取ったり、タブレットを活用することで自分のやりたいことに近づける高校に進学している。

私はこの作文を書くと決まった時、身近な存在である兄のことを書くことにした。しかし、兄のことを取り上げることで周りから心配されることがあった。それは、兄のことで私がからかわれたり、いじめられたりするのではないかということであった。兄は自分の特性を理解しており、支援学級で過ごしていた。しかし、特性を理解されず、からかわれることもあったそうだ。「ぼくは、ぼく。苦手なことを減らすために学べるところ、それが支援学級。言いたい人には言わせておけばいい。」と笑いとばしているそうだ。

そんな兄の強さを私は尊敬している。私は兄が努力をしている姿を知っている。あきらめず何事にも努力しているところ、誰とでも分けへだてなく話をしているところを知っている。誰が何と言ってもそんな兄のことが大好きである。だからもし、そのようにからかわれることがあっても、「人には違いがある。その違

いが個性でもある。」と思っている。だから、からかった人を笑いとばせるくらいの心の強さを持てるようにしたい。兄のように困難さが周りから見えにくい障害がある人にとってきちんと理解され、適切な支援を受けることのできる社会が当たり前に広がれば良いと思う。

そのために私ができることは、相手のことを正しく理解するために、友達との違いを認め合い、相手の良さを見つけ合うこと。それがみんなに広がればいいと思う。

サンテレビ賞

私の太陽Rちゃん

洲本市立青雲中学校　一年

岩鼻咲希

「一緒に遊ぼう！」

とさそってくれて

「ピアノ上手だったね。」

とほめてくれて手紙をくれたあの子を、友達になったあの子を私は忘れない。

小学六年生の時。あれは確か九月下旬あたりだった。夏休みが明けて少し経つのに暑い日が続いていた。コロナの影響で五月から十月に延期された運動会の練習はその頃始まった。運動会はダンスとリレーが定番だった。六年生は五年生と踊る。もちろん練習も一緒だ。体育館でふりを覚えてから運動場で練習する。体育館でふりを覚えるとき、学年別でペアを組んだ。私のペアはRちゃん。Rちゃんは「なかよし」というクラスの子だ。そこに行く子はなんらかの障がいがある子。Rちゃんもその内の一人である。

私は、正直障がいのある子と話すのが当時は苦手だった。話すのが上手でないから何を言っているのか分からなくなってしまい、どう反応すればいいのか頭の中でパニックになる。本気で話せない。私はそうやっ

て、障がい者という理由で決めつけていた。
Rちゃんと一緒に練習し始めてからまだ数える程しか経っていないのに、二時間練習が入ってきた。二時間練習の間の休み時間、Rちゃんから
「一緒に遊ぼう！」
とさそってくれた。なんだかとても嬉しかった。私は自然に笑顔がこぼれていた。少し遊んだらRちゃんは先生とどこかへ行ってしまった。授業のはじめ、Rちゃんは来ていなかった。少し寂しかったが、五分も経つと戻ってきてくれた。先生が教えてくれた。
「鼻血がでちゃって。もうやめておくか聞いたら首をふって『お姉ちゃんが教えてくれるから行く。』って言ったの。今まで二時間ずっと練習できたことないのに。」
と。その時のRちゃんは、やる気と笑顔にあふれていた。私との練習を楽しみにがんばって来てくれたと思うと嬉しさしかなかった。その時はがまんしていたけれど、嬉しすぎて家で、自分の部屋の中に隠れて泣いている私がいた。私はRちゃんにやる気をもらった。私はこれまで以上にもっと分かりやすく、Rちゃんが楽しいと思える時間を私がつくろうと一生懸命取り組んだ。
そして運動会当日。演技が終わってからの拍手は大きかった。嬉しかった。私とRちゃんはその後もろう下で会ったらハイタッチしていた。その時の私たちはいつも笑顔だった。
それから少し経って卒業式練習が始まった。これもまたコロナの影響で五年生の参加は不可能だった。でもある日、五年生が練習を見に来た。その後Rちゃんは、
「ピアノ上手だったね。本番がんばってね。」

と伝えてくれた。Rちゃんはいち早く私が歌の伴奏者と気づいてくれたそうだ。嬉しかった。私は選ばれたのにも関わらずミスが多かった。心が暗かった私にRちゃんが優しい光をくれた。その時気づいた。Rちゃんは私の太陽なのではないか、と。

「障がい者」という理由で決めつけていた私を恥ずかしいと思った。生まれてきた人はみんな平等。平等に、公平に。当たり前、当然なことは分かっているようで全然分かっていなかった。Rちゃんが教えてくれた。きっとそういうつもりでなかっただろうけど思い出にお礼がしたかった。だから私の言葉で手紙を書いた。卒業式前日にわたしたら喜んでくれた。その日のうちに手紙と折り紙をもってきてRちゃんは

「わたしたちともだち！」

と言ってくれた。たくさんの気持ちを込めて

「ありがとう」

と返した。もう目が涙で重いくらいだった。そしてちゃんと笑って

「またね。」

と言いハイタッチ。

卒業式のピアノ伴奏はとても上手くいった。Rちゃんのおかげかもしれない。Rちゃんにもらった手紙と折り紙は今も大切に机のひき出しに入っていて、たまに外に出すようにしている。出すたびに、思い出す。

私はそれから変わった気がする。人に対しての笑顔が増え、口調も前よりおだやかになった。人間だから口がきつくなってしまうときもにらんでしまうときもあるけど、これは忘れないでほしい。人はみな同じだということを。以前の私のように心の中でも障がい者だからと決めつけないでほしい。他のことでも一緒

だ。他人に対しての気持ちが変われば、笑顔が増える。だから私は笑顔でいると決めた。人々の笑顔が一つでも多く増えますように。

ラジオ関西賞

当たり前ではない

小野市立河合中学校　九年
佐々木カーンマックス　ロハン

「荷物チェックをしますね。」空港でそう言われて悲しい気持ちを感じた。僕の父はパキスタン人、母はブラジルと日本とイタリアのミックスだ。だから僕にはパキスタンとブラジルと日本とイタリアの血が入っている。

日本からブラジルへ向かうための関西国際空港での出国手続きの時、係の人から「荷物をチェックしますね。」と言われると僕たちは一時間以上も待たされた。父以外の家族はチェックが終わったのに。それはなぜか。僕は父に聞いた。父はこう言った。「ロハン、よく聞いてな。昔、空港でアラブ人がテロを起こした。だから私みたいなパキスタン人には信用がないと思うんだ。」と。その事件を起こしたのはパキスタン人ではなかった。では、なぜパキスタン人も信用されてないのか。父に聞くと、テロを起こした国はイスラムでパキスタンもイスラムだから。また公用語が同じだからということだった。パキスタンの公用語は代表的に二つある。英語とアラビア語だ。その理由だけで信用がなくなり、荷物チェックが一時間以上もかかってしまうのは悲しくて悔しかった。

パキスタン人はとてもいい人がたくさんいる。僕がパキスタンへ行った時、周りの人たちは僕のことをとても大切に思ってくれた。僕はそれがうれしくて、居心地がとても良く、一生ここで暮らしたいと本気で思ったくらいだ。今でも父と海外へ出発する時、いつも荷物チェックを受けている父の前を通り過ぎて行く人たちの視線を感じて恥ずかしい気持ちになる。

母の母国ブラジルは日本とは違い、先進国ではない。日本では当たり前のように飲める水道水も、ブラジルでは飲むことができない。実際、妹はそれを飲んで体調が悪くなったことがあった。

中学二年生の時に、僕は母の妹の勤める中学校に一度通ったことがある。日本と同じ単元を学習するのだろうと思っていたら、待っていたのは日本では小学校四年生レベルの分数のかけ算でとても驚いた。僕は簡単に解くことができたが、みんなにはとても難しそうだった。ブラジルの中学校は半日で終わり、午後はアルバイトをしている生徒もいると聞いた。中には危険な仕事もあるそうだ。生徒の問題行動も殺人、暴力、麻薬など、日本とは違う。学校に行けない子供たちも多い。

日本の中学生は、「学校だるい」と言うことがあるけどブラジル人は言わない。それは、学校に行くことが当たり前ではないからだ。日本の中学校は、教育にかかる費用を国や自治体が負担してくれているがブラジルは保護者が全て払わないといけない。でも、中には払えない家庭もある。だから学校に行きたくてもいけない子供たちがたくさんいるのだ。僕はその現実を知り、つらいと感じた。僕たち学生は、日本の教育環境に感謝するべきではないのだろうか。僕はそう思う。ブラジルでの経験で、自分は、日本の良さに気づき、日本が大好きだと感じることができた。

外国にルーツを持つ自分は、幼い頃から友だちと当たり前のように過ごしてきたので、これまでの学校生

活で生きづらさを感じたことはあまりない。しかし、初対面の人と出会ったときに英語で話しかけられたり、「外国人なのに」という言葉で自分を判断されたりすることがあった。また、ブラジルに行ったとき、日本人の見た目をバカにする発言を聞いてとても腹が立ったこともあった。

でも、僕は外国にルーツを持つ両親を誇らしいと思っている。父はイスラム教徒で、母はキリスト教徒と一つの家庭の中に二つの宗教がある。18才になれば、僕は日本、パキスタン、ブラジルの中から一つの国籍を選択し、宗教も決めることになる。家庭内でも意見が違うので、自分で選択するということが難しいが、生き方を自分で選ぶということは素晴らしいことだと思っている。

将来の夢は家族と農業をすることだ。また、農業が発展していないパキスタンに行き、日本で身に付けた技術をパキスタンに広めたいと思っている。

兵庫男女共同参画委員会賞

男女共同参画社会について

新温泉町立浜坂中学校　三年

福原　唯

最近、ＳＤＧｓという言葉をよく耳にする。二年生の文化祭では、新聞づくりのテーマでも扱った。その中で、環境問題ということに目が行きがちだった。

そのようなとき、図書館に行くとＳＤＧｓのコーナーの、「せかいでさいしょにズボンをはいた女の子」という絵本が目に入った。女性参画というのもＳＤＧｓの目標に含まれていたのだという軽い気持ちでその本を借りることにした。

そしてその夜、好きな俳優が出ているからと見始めたドラマでは、働く女性がテーマとなっていた。管理職に女性五割ということを目標にしていたが、周囲からの差別や育児と両立する難しさ、女性側本来の仕事の意欲等の問題があり、その困難に立ち向かうという話だった。これが現代に起きている女性問題だと改めて思い、さらに興味を持った。

それから別のドラマでも昭和五十年代の働く女性がテーマになっているものがあった。女性は結婚と同時に仕事を辞め、家庭に入る。男性はバリバリ働く。また、会社にはスカートをはいて出社する、お茶くみは

女性がするという風潮。そしてそれに不満を持つことはおかしい、それが当然だと女性の新聞記者は上司から反対を受けながらも、そのことを記事にした。その結果、世間から称賛を受けた。そしてこの回はまさに私が図書館で手に取った「せかいでさいしょにズボンをはいた女の子」をモデルにしたものであるとあとから知った。

この絵本は百五十年前の本当の話であり、そして現代のドラマでも女性の社会進出問題は扱われている。つまり、女性の社会参画問題は百五十年以上前から現代まで解決できずに問題視されたままなのである。様々な技術が大きく発達してきているにも関わらず、この問題については飛躍的な発展はしておらず、解決されていないのだと改めて思った。

その理由の一つとして、女性と男性は体が違うことが挙げられる。女性は妊娠、出産ができる体であり、男性とは異なる。その体の仕組みは生まれながらに備わっているものであり、それを全うすることが社会において当然とされてきた。私はその考えが完全に間違っているものだとは思わない。私も子どもを産んで育てたいという願望があり、それができるのは女性として生まれてきたからだと考える。ただ、その体の仕組みと「女性はこうあるべきもの」「男性はこうあるべきもの」という概念を一緒にしてはいけないと思う。

「スカートは女性、ズボンは男性」、五十年前とは違い、今は女性が一般的にズボンをはくことが定着している。しかし中学校の制服がスカートである学校はまだ多くあり、ズボンをはくには大きな壁がある。それはこれまでに植え付けられた概念がみんなの中にあり、抜け出せていないからだ。

また、妊娠、出産においても女性だから必ず果たすべきものではなく、それも個人の自由である。一人の人間として、自分で決めた一生を歩むことが私たちにある権利である。それに、出産は女性しかできなくて

も育児は女性でも男性でもできるはずである。そして社会全体でもできるはずである。女性は家事、育児が得意なのではなく、それらに毎日正面から向き合ってきたことが多いから得意になるだけだと思う。

子どもを育てるときには、子どもと触れ合う時間の多さで子どもからの愛情、信頼の深さは増す。会社でも同じだ。仕事に費やす時間が多ければ仕事をうまくこなせるようになる。会社からの信頼も上がる。家庭の時間と会社に勤務する時間のバランスが母親、父親共に平等となれば子どもとも会社とも信頼関係が築けるはずだ。

私は今、将来どんな職業につきたいかはまだ決まっていない。今まで保育士や看護師になりたいという思いがあったが、どれも女性特有の職業という思い込みで、自分がなりたいものに当てはめていた気がする。それは、その方が結婚、出産後も女性同士でフォローし合っている職業なのではというイメージがあったからだ。

しかし、これからは女性の職業として見るのではなく、「ひとりの人間としての職業」をまず頭に入れて、近づいてくる将来について真剣に考えていきたいと思う。そして、私が社会に出る時には、女性が女性をフォローをするのではなく、誰もがフォローし合える社会。性別にとらわれないで職業を選べる社会になっていることを願う。そして私も、社会に出た時にその社会をつくる一員として働きかけていきたい。

兵庫子ども人権委員会賞

閉じこめられた命

神戸市立駒ヶ林中学校　一年

三上絢子

「ちっこい手が来たな」

私はこの言葉が大好きでした。

社会で誤解されてきたハンセン病。感染力が非常に弱いにも関わらず、伝染病・遺伝病と恐れられ、「とても怖い病気」と誤った認識を植え付けられてきました。薬で治るはずなのに患者を島などに隔離したそうです。

岡山県にあるハンセン病療養施設・長島愛生園で私は多くの人と出会いました。とても心に残っているのが、回復者の方と握手をしたときのことです。「本当に指がない人がいるんだ」と驚いたのを覚えています。また別の時にはハンセン病の影響で目が見えなくなった方と会いました。「ちっこい手が来たな」と喜んでもらえたときは嬉しくて、次に会うのを心待ちにしていました。でも、その方も、私が会った一週間後に亡くなったと聞き、また会いたかったのに、と悲しくなりました。また、十三歳の頃に連れてこられ、七十年以上愛生園で暮らしている人もいます。普通の生活が奪われた人がいるんだと改めて知りました。

私が驚いたのは、この病気で苦しんだのは患者さんだけでなくその家族も、ということです。ハンセン病患者だと分かると療養所へ連れて行かれ、残された子どもは「身内が病気」というだけで学校で差別やいじめを受けたり、仕事をクビになったり、結婚できなかったりすることがあったそうです。だから、「隠さないといけないことなんだ」と思ってきた人たちがいます。

親がハンセン病患者だった黄光男（ファングァンナム）さんは一歳の時に孤児院に入り、九歳の時、やっと家族と一緒に住めるようになったそうです。しかし、自分と同じように親のいない子たちと暮らしていたのに、いきなり親と名乗る人と過ごすことは辛かったと黄さんは言います。一緒に暮らせることになっても複雑な気持ちを抱えることになったそうです。私はもし自分だったら・・・と考えただけで苦しくなります。黄さんの思いはそれ以上だったはずです。

今ハンセン病による差別は表面的にはなくなったように見えます。でも本当に、ハンセン病問題は解決したのでしょうか。私がそう疑問に思う理由は、愛生園にある納骨堂の話を聞いたからです。そこには引き取り手がなく、亡くなってもなお故郷に帰られなかった人たちの遺骨が納められています。なぜ誰も引き取らなかったのか。それはその家族が周りからどう見られるか、差別を受けるのではないかという不安な思いがあったからだと言います。世の中では、ハンセン病に関する偏見が今もなお根強く残っていることを感じます。生きている間に「閉じこめられた命」は、死んだあとも閉じこめられたままです。

私は、生きている人はもちろん、亡くなられた方も自分の帰るべきところに帰してあげたいと思いました。しかし、現在入所者の平均年齢は八十五歳です。身内も亡くなったり、引き取りを拒まれたり、一生を施設で過ごさなければならなくなりました。

「とても怖い病気」と恐れられてきたハンセン病。治っても島からは出られず、入所者の自由を奪ってきました。長島愛生園には人間としての当たり前の権利を取り戻すという思いが込められた「人間回復の橋」があります。かつて愛生園に渡るには渡し舟で島へ行くしかありませんでした。隔離政策がなくなっても入所者の方は自由に行き来することができなかったそうです。この橋はハンセン病療養所と社会を一本の道でつないでいます。

私がハンセン病について学んで考えたことは、自分が信じている情報が必ずしも正しいものではなく、それが誰かを苦しめているかもしれないということです。自分の誤った思い込みで誰かを傷つけることがないように、真実を見極める力を身につけたいです。そして、誰もが差別されないような社会を実現したいです。

人権はみんなのものなのだから。

兵庫高齢者・障がい者人権委員会賞

知ろうとする人でいたい

姫路市立豊富小中学校　九年

萩原花帆

私はある日、母からこんな話を聞いた。小学校の支援学級に通っている子が、担任から虐待を受けたという話だ。暴力に加え暴言まで吐かれ、その子は「学校が爆発したらいいのに…」とまで言っていたそうだ。

私はこの事にショックを受けた。なぜなら、私の妹もダウン症という知的障がいがあり、支援学級に通っているからだ。毎日、普通学級にいる友達や色んな先生と楽しそうに過ごしているため、私は支援学級には妹のような子に理解がある人がいるのだと思い込んでいた。だからこそ、担任が自分に起きた事を上手く伝えられない子に、繰り返し行為を行っていたということが卑劣だと思った。ハンディがあるということで、特別扱いするというのはある意味差別になってしまうし、場合によりその人自身の成長を妨げてしまう可能性がある。しかし「差別しない＝周りと全く同じように接する」という訳ではないのだ。この話を聞いた時、私はふとあることを思い出した。

それは、学校の道徳で、目の不自由な人についての授業を受けた時のことだ。その授業を受けた時、みんなが出した意見は、「助けが必要かを聞いて、必要だと言われたら助ける」というものだった。確かに

これは良いことだと思う。

しかし、それが知的障がい者だったならばどうだろうか。その人自身が何を助けてもらいたいのか分からない場合や、うまくコミュニケーションを取れない場合等、道徳の時間で出した意見が使えないこともある。それに、パッと見では分からないこともあるため、知的障がいがあるということにさえ気づかない人も多いだろう。

もしかしたら、周りにも気付いていないだけで、ハンディがある人がいるかもしれない。しかし、今まで学校の授業で知的障がい者の授業を受けたことはなく、目や耳、足等の身体的な障がい者について学んできた。様々なケースがあり、これといった接し方がある訳ではないので、授業でするというのは難しいのかもしれない。けれど私は、知的障がい者についてもっとたくさんの人に知ってもらいたいと思った。

一言言っておきたいのは、知的障がい者だからといって優しく接しなければならないというのは違うということだ。間違っていることは注意しなければならないと思う。実際、私も妹と暮らしていて、急にテレビのスイッチを切られたり、悪ふざけをされたりすると、イラッとすることが多々ある。だめなことはだめだと分かってもらいたいし、甘やかされたまま大人になって、周りに疎まれる存在にはなってほしくない。だから、私は普段から妹を特別扱いせず、たくさん喧嘩をしたり、怒ったり、叱ったりしている。

姉である私が言うのもなんだが、妹はすごく可愛いくて、面白い。知的障がいがあるからといって、必ずしも守られるだけの存在ではない。妹はひょうきんな仕草で私たちを和ませたり、笑わせたり、しんどいときには慰めてくれたりもする。また、妹にしかできない方法で多くの幸せを感じさせてくれ、家族を明るくしてくれる大切な存在だ。そういった妹の良いところを他の人にも知ってもらいたいと思う。

妹の将来に全く不安がない訳ではない。例えば、妹は今小五だが地域の中学校に通うか、支援学校に通うかも大きな選択となる。けれど、どこに進んだとしても、今の様に温かい人たちに囲まれて、これから出会うたくさんの人が、妹といて楽しいと思ってくれ、妹も楽しく過ごせるならそれが一番だと思う。

ハンディがあるということで、一歩引いて接するのではなく、その人を一人の人として見たら、その人が私たちと変わらず、色んな性格や思い、考えがあることが分かるはずだ。私は当たり前であるこのことに、気づく人が増えてほしいと思う。

知的障がい者の作品をアートとして広めている企業がある。普通でないことが、同時に可能性でもあるという考え方が、私はとてもいいなと思った。普通ではないということは事実だ。でも、それは決して恥ずべきことではないと思う。皆がその人の個性を認められて、上も下もなく共に生活を送ることのできる世界になって欲しいと思う。

私にとって、知的障がいがある妹と共に暮らすことは普通のことで、そういった人たちがこの世界にいるというのも、ごく普通のことだ。だが、もし妹に知的障がいがなければ、このような考えを持つことができていただろうか。もし、知的障がいがある人が助けを必要としているかもと気付いても、どうすれば良いのか分からないから、見て見ぬふりをするかもしれない。軽はずみに手を伸ばしてはいけないことのように思うかもしれないし、自分には荷が重いと感じるかもしれない。でも、彼らのことを少しでも知っていたら、伸ばせる手が増えるのではないかと思う。だから私は、彼らを知っていきたいと思うし、彼らを少しずつでも知ろうとすることで、共に生きていくということができるのではないだろうか。

兵庫県大会優秀賞

真の優しさとは

豊岡市立豊岡北中学校　三年

下　垣　優　有

私の「優有」という名前には「誰にでも優しくできる子、優しくされる子になってほしい」という親の願いが込められている。名前について使命感を抱いたりしたことは、今までにない。けれども、私の中でずっと疑問に思うことがある。本当に優しい人って、どんな人なのか。そもそも優しさってなんなのか。私がうまれてから十四年の月日が経つ。十四年。未だ私は本当の優しさの形を探し続けているのかもしれない。

自分に優しく。これは私が今までに受けてきた、たくさんのいじめから学んだことだ。

私はこれまでに、使われたり、いじられたりといういじめを、たくさん受けてきた。最初は仲間だと思っていた友達も大きな剣を持って、私の心をブスブスとつきさしていく。こうして、いじめはヒートアップする。以前の私は、常日頃から嫌なことを嫌と言えず、自分だけが我慢するならそれでいいと考えていた。私は自分を守るための盾を、自分から捨ててしまっていたのだ。

しかし、自分だけならという考えも、あるユーチューバーの言葉をきっかけに一転した。この人も、私と同じように、自分だけならという考え方をしていたらしい。でも今、こんなことを言っている。「自分のこ

とを傷つける人は、自分を傷つけているだけじゃなくて、自分を大切にしてくれている人の気持ちも傷つけている。自分のことも大切にしないといけないと思った。」と。はっとした。自分が我慢をすることで家族や親友がつらい思いをするなんてあっていいはずがない。

そこから、私は自分のことも大切にしようと考えを改め、嫌なことは嫌だと言えるようになった。最初のうちは、ノリが悪いだとか、性格が変わってしまったとかと言われたが、自分を大切にし続けた。そうすると、自然と、いじめをしてきていた人たちと仲良くなることができたのだ。今では親友になるほどに。

この経験からあることに気がついた。前まで築いてきた友情は見せかけのものだったということだ。嫌なことを嫌と言えなかった私は、いじめてくる友達に、いい顔をした仮面をかぶって接していた。そうやって築いてきた友情は、とても浅い。それに対して、今は仮面をはずした自然体の私が、友達を目の前にしてたくさんの笑顔を見せている。以前より、友達とより濃い関係、時間をつくれている。今、私は声を大にして、以前の私のようにいじめを受けている人に、こう伝えたい。自分に優しくなっていい。自分を一番守れるのは、間違いなく自分自身だと。

見知らぬ人に優しく。これ以上に難しい優しさってあるのだろうか。

見知らぬ人とは、見覚えがない、面識がない人のことを指す。自分以外の人でも親しい他人が困っていたなら、力になりたい、助けたいと思うだろう。しかし、会ったことのない、顔を見たことすらない人に対して、優しくする。今の世の中にそのような雰囲気は感じられない。今でも紛争や誹謗中傷の言葉が日常生活のなかで飛び交っている。見知らぬ人にも優しくできる。そんな世の中がつくれたら、どれだけ平和で生きやすいことだろう。

少しでもやれることを。その思いから、私が最近やっていることがある。募金をすることだ。今は至るところに募金箱や、募金をして難民の人々を支援するサイトなどがある。私は、おつりをもらったとき、レジの横にある募金箱へ十円を入れるようにしている。こんなことを言うと、たかが十円で、と思うかもしれない。やるだけ無駄だと。私もそう考えるうちの一人だった。ある体験をするまでは。

四年前。小学六年生、春。学校で募金を集める活動をしようということになったのだ。当時、児童会本部をしていた私は、全校生徒へ募金を薦める立場となった。当然、募金に興味などない。その時、募金を薦めているサイトを見た。サイトにはこんなことが書いてあったのだ。「あなたの力を必要としている人がいます。」その時、気づかされた。困っている人々はお金を必要としているのではなくて、私たちの力を必要としているのだと。私が無駄だと思った十円も、その人たちからみたら、価値のある十円だと。見知らぬ人に優しく。そうできるチャンスは、意外と日常生活の中に転がっていたのかもしれない。

優しくすることは、さりげなくも、大袈裟にもできる。時には、何もしてあげないことが優しさだったりもする。

人生百年時代。この先なにを真の優しさというのか、答えが出ることはないだろう。出てはいけないものでもあると思っている。それほど優しさって難しくて、深くて、濃いものだと思うから。ひとくくりでは表せない感情の塊、優しさ。今や私たちが生きる上でかかせないものとなっている。人やもののことを思って行動し、自分自身が幸せだと思える日々を送れる。そんな素敵な大人になりたい。

兵庫県大会優秀賞

いじめ

尼崎市立成良中学校　三年

相木彩寧

二〇二一年のいじめの認知件数は五十万件以上だ。認知件数だから実際にはまだあるだろう。これでも、前年度より十五・六パーセント減少したという。

自分も小学校一年～三年の三年間、同じクラスの子だった子からちょっとしたいじめを受けていた。最初はいつもその子に鉛筆や消しゴムを貸すだけだったが、だんだん貸した物が返ってこなかったり、やっと返ってきたかと思った消しゴムに大きな穴や鉛筆でさされた大量のあとがついていたりした。メンタルが弱い自分はやめてすら言えず、泣きそうになりながらこらえていた。先生や親に言うのすら怖くてだんだんひどくなるいじめに耐えていた。ただ、毎日やられるわけではなく、その子と席替えで席が近くなった期間しかいじめは受けなかった。でも、それでも十分つらかった。席替えの日が怖くて、その日が近づくたびに震えが止まらなくて、常に真っ青で何も入ってこなかった。

そして、二年生の時、勇気を出して親に「いじめられているから学校に行きたくない」と言うと親は「連絡帳に書いたるから学校には行って。先生は絶対助けてくれるから。」と言って、その言葉を信じて学校に

行ったら、先生は自分とその子の席が近くなるとそこから自分を離すようにしてくれた。でも怒ってはくれなかった。これで少し平和になるのかなと思ったら違った。その子は、自分の友達と陰口を言ってくるようになったり、通りすがりに椅子をけられたり、物を盗んできたりとさらにひどくなった。先生は全く怒ってくれず、毎日がつらくて、自分が勇気を出して親に言ったあれはなんだったのだろうと夜になると一人外で泣いて、朝になると、早くに目が覚めトイレで吐く。そのくり返しで、親に言っても先生を頼っても特に意味がなく、死んでやろうかと正直考えてた。

そして、三年生になって、体調が悪かった日に、その子と他の子たちが自分を一人ねらいするおにごっこをしようと言われ、怖くて断れず泣きそうになっていた時、それを見ていた担任の先生が、「体調悪い子にそんなんさせて何が楽しい？泣きそうなってんの分からんか？」と昼休みの時間を潰して怒ってくれた。

その後、先生に一年生からずっといじめられていることを言うと、そのことも怒ってくれ、連絡帳に気づいてあげられなくて、申し訳なかったと親あてに書いてくれた。その子も謝ってくれてやっと三年間のつらい日々が終わった。その後も担任の先生はいじめについての全校集会を開いたり、いじめていた子を監視してくれたり、定期的に何かあったかと聞いてくれたりした。

今まで先生は勉強を教えるだけの仕事で生徒の問題はどうでもいいのだと思っていた。でも、中には生徒のことをとても考えてくれて、忙しい中でもちゃんと向き合ってくれる先生もいるということがこの時分かった。そして、その先生は三年生が終わった後も、いじめていた子と六年生まで同じクラスにならないようにしてくれ、廊下で会ったときに「楽しくやってる？」などと気にかけてくれた。その先生には今でも感謝しかない。

自分には助けてくれる人がいたが、中にはいじめに耐えられず誰からも助けてもらえずに自殺をしてしまった人たちがいる。いじめが原因で自殺してしまった人は二〇一九年で四百人以上もいる。

その人たちに周りは「生きていればいいことあるのに」や「そんなことで死ぬの」などとよく口にする。自殺した人たちや昔の自分は天国に行きたかったとかそういうのではなく今あるこの地獄から抜け出したかったのだと自分は思う。生きるのがつらい、だから死んで楽になりたい。死ねば地獄から解放される、そう思ったから。人によって耐えられるつらさは違う。だから何も知らない人たちからそんな言葉が簡単に出るのが嫌だ。自分は今でも昔のことをよく覚えている。そして、いじめが終わっても席替えがまだトラウマで怖く、誰かがこそこそ話していることが自分への陰口じゃないかと思ってしまう。いじめられていた日々は絶対に忘れないだろう。

今は、昔と違って嫌だと思うことは嫌だと言えるようになり、友達と楽しく学校生活を送れている。そして、今の将来の夢は、自分を助けてくれた先生のような小学校の先生になること。楽しい六年間をその子たちが築けるよう、中学までいじめを続かせないよう、どのような生徒にも、寄り添えるような小学校の先生になりたい。いじめが少しでも減っていくように自分はせめて、自分の守れる範囲は守り、気付いてあげられる範囲は気付く、そんな先生を目指して頑張ろうと思う。いじめ０というのは難しいかもしれないが、その一歩をつくれるよう、いじめ０への橋の一部になれるようになりたい。そして、そんな先生になって、あの時助けてくれた先生に直接もう一度『ありがとう』を伝えたい。

兵庫県大会優秀賞

私が学んだこと

小野市立河合中学校　七年

堀田望乃

「大丈夫ですか?手伝いましょうか?」私が、この言葉を聞いたのは、小学校四年生で登校のために乗っていた電車を待っている時だ。その日もいつも通り、駅で電車を待っていた。すると、ホームに一人の男の人がやって来た。男の人の白杖を持って、目を閉じられている姿から、私には視覚に障がいのある人だとすぐにわかった。私は、なんとなく、その人から目が離せなかった。

しばらくして、電車が駅に入ってきて、扉が開いた。男の人が乗り込もうとしたが、目が見えていないからか、乗り込みにくそうに私には見えた。ホームと電車の間にすき間もあり、危険だと思って声をかけようかと考えたが、私の中の「周りの人に何と思われるだろう。」という思いから声をかけられなかった。声をかけて、助けてあげないといけないとわかっていながらも、たくさんの人がいる中で、私がどのように思われるかという気持ちが勝ってしまい行動することができなかった。

そのとき、「大丈夫ですか?手伝いましょうか?」と声をかけた人がいた。その人は、一緒の電車通学の五年生の先輩だった。「ありがとうございます。」男の人は、声をかけてもらったことで安心した様子で、

電車に乗られた。私には言えなかった一言、「大丈夫ですか？手伝いましょうか？」の言葉を聞いて、私にはない優しさを感じ、ホッとした安心する気持ちも感じた。

その白杖の男の人に再会したのは、小学校での視覚障害のある方の話を聞く授業だった。その人は、生まれつき目が不自由で、見ることができないそうだ。生活の中に不自由を感じられることも多く、例えば、スマートフォンを使うときは、音を聞いて操作をされたり、移動は目的地に必ずつける、タクシーを利用したりなど、他にも多くのことを生活の中で困られていることを話してくださった。そして、話の最後に、「電車を利用することがあるから、私を見かけたら声をかけてくれると嬉しい。」と言われていた。

それからも駅でこの男の人を見かけることがあったが、その度に、先輩が真っ先に声をかけ進んで手伝いをするのを見ていた。そして、先輩が行うことが習慣づき、先輩が行ってくれるから大丈夫という気持ちから、あたり前のことと感じるようにもなっていた。

そして、二年が過ぎ、私たちが六年生になった。先輩は自転車通学になり、駅にはあの男の人と私たちだけになった。男の人が電車に乗られるときも、私を含めて誰も声をかけない、手伝おうとしないことがあたりまえの風景になりかけていた。その時、四年生の時に聞いた、「電車を利用することがあるから、私を見かけたら声をかけてくれると嬉しい。」のことばが思い出された。私が手伝うべきだと決心して、不安はあったが、思い切って声をかけた。「大丈夫ですか？手伝いましょうか？」男の人の嬉しそうな笑顔を見て、「ありがとうございます。」の声を聞いたとき、自然とうれしくなり、私の中にあったモヤモヤした気分が消えていた。

これらの体験を通して、私は「おもいやり」と「支え合い」を学べた。わたしたちの周りには、障がいに

よって生活が困難な人たちがおられる。障がいということばだけでなく、誰もが生活を送る中で、困っていることもあると思う。そんなときに、少しの勇気と思いやりを持って、ひと言声をかけることが大切だ。相手の状況や気持ちを考えて行動することは、誰もが過ごしやすい社会をつくるために大切なことだと思っている。

人の役に立てる私になりたい。私はこのように考えるようになった。一人一人の「おもいやり」が集まって、「支え合いの社会」が実現する。私も周りに流されず、気をつかいすぎず、強い意志を持って、人の助けになれる人になりたい。

【奨励賞】25 編

作　　品　　名	学　校　名	学年	氏　名
見た目よりも大切なこと	神戸市立垂水東中学校	2	平瀬晴佳
もう一度考えてみよう	神戸市立鷹匠中学校	2	小木曽萌乃
平和な日常を守るために	西宮市立甲陵中学校	3	大上敦也
この世界を優しさで包み込めるように	芦屋市立山手中学校	1	白水果憐
私の生まれ育った街	西宮市立山口中学校	2	矢倉吉乃
思いやりの心	仁川学院中学校	2	八木那由多
どうしても	川西市立明峰中学校	1	野中清汰
障害のある人に関する問題	宝塚市立山手台中学校	3	前田琉花
パピーを通じて私が考えたこと	川西市立東谷中学校	2	小西由夏
私のおじいちゃん	三田市立けやき台中学校	3	苫名　咲
女性問題を解決できたら	川西市立緑台中学校	3	松浦優里菜
白い髪の少年	尼崎市立小園中学校	2	上野文琴
思いやりの活動	三木市立緑が丘中学校	2	長谷川朋
愛で溢れる社会へ	明石市立魚住中学校	3	茨木理沙
プレゼントフォーユー！	明石市立高丘中学校	3	田渕万梨亜
母の話を聞いて	丹波市立青垣中学校	2	田野陽葵
ハンセン病について	丹波市立山南中学校	1	田畑澪菜
「えっ　まさか・・・。」	丹波篠山市立丹南中学校	1	黒田蒼太
ジェンダーギャップについて思うこと	姫路市立朝日中学校	2	木村優月
言葉の力	福崎町立福崎東中学校	2	岡本瑞生
幸せはみんなで食べるごはんの中に	加古川市立加古川中学校	3	神屋明日美
私の母と精神病への理解	佐用町立上津中学校	1	松井　澪
コロナいじめについて	赤穂市立赤穂中学校	3	有田唯楓
ジェンダー差別について	南あわじ市立南淡中学校	1	居上侑加
ウクライナの明日	洲本市立由良中学校	1	渋谷日桜莉

Kids Room

（法務省きっずるーむ）

子どもの人権SOS-eメール

https://www.jinken.go.jp/soudan/PC_CH/0101.html

子どもの人権110番

https://www.moj.go.jp/KIDS/jinken110/

人権擁護局のLINE

アカウント
@JINKEN01

人権擁護局のフェイスブック

https://www.facebook.com/HumanRightsBureau.MOJ/

人権擁護局のツイッター

アカウント
@MOJ_JINKEN

人権擁護局のフロントページ

http://www.moj.go.jp/JINKEN

ひとりで悩まず相談してください

LINEじんけん相談 @法務局

相談時間 月曜日～金曜日（祝日・年末年始を除く）
午前8時30分～午後5時15分

対象者 大阪府、京都府、兵庫県、奈良県、滋賀県、和歌山県にお住まいの方

相談方法 友だち登録してご相談を!
相談が集中した場合は、対応できない場合があります。改めて相談するか、電話又はメールによる相談窓口をご利用ください。

LINEのほかに、電話やメールでも相談することができます

子どもの人権110番（通話無料）
0120-007-110
相談時間 月曜日～金曜日（祝日・年末年始を除く）
午前8時30分～午後5時15分

子どもの人権SOS-eメール
https://www.jinken.go.jp/kodomo
インターネット人権相談 検索

大阪法務局・大阪府人権擁護委員連合会

❖人権問題のご相談はお近くの法務局・人権擁護委員へ❖

相談は無料で、秘密は固く守られます。

❖常設相談所

- □ **神戸地方法務局人権擁護課・神戸人権擁護委員協議会**
  〒650-0042 神戸市中央区波止場町1番1号　Tel 078-392-1821
- □ **神戸地方法務局西宮支局・西宮人権擁護委員協議会**
  〒662-0942 西宮市浜町7番35号　Tel 0798-26-1302
- □ **神戸地方法務局伊丹支局・伊丹人権擁護委員協議会**
  〒664-0881 伊丹市昆陽1丁目1番地12　Tel 072-779-3454
- □ **神戸地方法務局尼崎支局・尼崎人権擁護委員協議会**
  〒660-0892 尼崎市東難波町4丁目18番36号　Tel 06-6482-7417
- □ **神戸地方法務局明石支局・明石人権擁護委員協議会**
  〒673-0891 明石市大明石町2丁目4番25号　Tel 078-912-5564
- □ **神戸地方法務局柏原支局・柏原人権擁護委員協議会**
  〒669-3309 丹波市柏原町柏原516番地1　Tel 0795-72-0176
- □ **神戸地方法務局姫路支局・姫路人権擁護委員協議会**
  〒670-0947 姫路市北条1丁目250番地　Tel 079-225-1926
- □ **神戸地方法務局加古川支局・加古川人権擁護委員協議会**
  〒675-0017 加古川市野口町良野1749番地　Tel 079-424-3555
- □ **神戸地方法務局社支局・北播人権擁護委員協議会**
  〒673-1431 加東市社539番地2　Tel 0795-42-0201
- □ **神戸地方法務局龍野支局・龍野人権擁護委員協議会**
  〒679-4167 たつの市龍野町富永879番地2　Tel 0791-63-3270
- □ **神戸地方法務局豊岡支局・豊岡人権擁護委員協議会**
  〒668-0024 豊岡市寿町8番4号　Tel 0796-22-2703
- □ **神戸地方法務局洲本支局・洲本人権擁護委員協議会**
  〒656-0024 洲本市山手1丁目2番19号　Tel 0799-22-0497

相談時間はいずれも月曜日～金曜日（休日を除く）午前8時30分～午後5時15分まで

❖特設相談所

市役所や町役場で開設しています。
日時などはお近くの法務局におたずねください。

❖外国語人権相談ダイヤル

ナビダイヤル **0570-090911**

月～金曜日（休日を除く）　午前9時～午後5時まで
対応言語　中国語、韓国語、英語、フィリピノ語、ポルトガル語、ベトナム語、ネパール語、スペイン語、インドネシア語、タイ語

発　行　令和５年２月１日
発行所　神戸市中央区波止場町１番１号
神戸地方法務局　兵庫県人権擁護委員連合会
TEL078(392)-1821(代)　FAX078(392)-0180
印刷所　〒651-0094　神戸市中央区琴ノ緒町１丁目5-9
株式会社　旭成社

人権イメージキャラクター
「人ＫＥＮまもる君」
「人ＫＥＮあゆみちゃん」

禁転載
この作品集の作品を地方公共団体が広報誌に掲載したり、学校が教材に使用される場合は、神戸地方法務局人権擁護課（078－392－1821代表）まで、連絡してください。

ひとりで悩まずにご相談ください

人権に関する問題でお悩みの方は、
お近くの法務局・地方法務局又はその支局までご相談ください。

電話でのご相談（平日 8：30～17：15）

みんなの人権110番

差別や虐待、パワーハラスメントなど、様々な人権問題についての相談電話です。電話は、おかけになった場所の最寄りの法務局・地方法務局につながります。
※ PHS・一部の IP 電話等からはご利用できない場合があります。

子どもの人権110番（通話料無料）

いじめ、虐待など、子どもの人権問題に関する専用相談電話です。

女性の人権ホットライン

配偶者・パートナーからの暴力やセクシュアル・ハラスメント等、女性の人権問題に関する専用相談電話です。
※PHS・一部の IP 電話等からはご利用できない場合があります。

みんなの人権110番	子どもの人権110番(通話料無料)	女性の人権ホットライン
0570-003-110（ゼロゼロみんな の ひゃくとおばん）	0120-007-110（ぜろぜろなな の ひゃくとおばん）	0570-070-810（ゼロナナゼロ の ハートライン）

インターネットでのご相談

インターネット人権相談受付窓口URL

https://www.jinken.go.jp/

PC、携帯、スマホ共通です。

インターネット人権相談　検索